令和七年度入学式式辞

石鎚の山々が銀の衣を脱ぎきれず、冬が舞い戻ったかと思うと急に温かくなり、春を待ちわびるとまた、寒の戻り。風の強い日も続き、近くの地域では山火事が広がり、長い期間沈静化せず、被害状況も深刻でした。恵みの雨もあり、「鎮圧」となりましたが、被害にあわれた皆様には、心よりお見舞いを申し上げます。

満開の桜がこの「養正が丘」に勢ぞろいしましたが、それも刹那の咲き誇り、少しずつ葉桜に変化し始め、自然が生み出す色の移ろいに改めて新鮮な驚きを感じています。自然も社会も人事もすべてのものが躍動感あふれる今日の佳き日に、西条市副市長明比卓志様、ＰＴＡ会長吉實勇治様はじめ、多数の御来賓の皆様に御臨席を賜り、令和７年度愛媛県立小松高等学校入学式を執り行うことができますことは、大きな喜びであるとともに、心より感謝を申し述べます。ありがとうございます。

先ほど、入学を許可いたしました１０８名の皆さん、御入学おめでとうございます。

本校は、今年で創立１１８年目を迎える伝統校です。江戸時代に小松藩の陣屋町として発展したこの地域は、非常に教育熱心な土地柄で、江戸時代後期に近藤篤山先生を招聘し、養正館という藩校が創設されました。また、篤山先生の教えの流れを汲む丹美園先生が全国でも珍しい女子教育のための寺子屋をこの地に開いたことが、この小松が「愛媛近代女子教育発祥之地」と言われる所以ともなっています。御存じのように、皆さんが現小松高校の最後の入学生となり、次は新しい小松高校として生まれ変わることになります。今までの伝統を受け継ぎながらもこの地域の学校が協力して、新しい学校づくりを進めています。そのために持続可能な教育を追究しながら施設や設備の充実も図っています。この伝統と先進性を備えた環境の中でこれから始まる新しい高校生活に向けて皆さんへのお願いを一つ伝えさせてください。

それは、今生きていることを一番大切にしてほしいということです。静岡県に萩田大貴という私の甥がおりました。本来ならば20歳を迎えています。高校に入学し、野球部に入部しましたが、数日練習したのみですぐに体の不調を訴え入院をしました。症例としては、世界的に珍しく、治療が困難な病で高校一年生の夏を病院のベッドで過ごし、その年の９月にはこの世を去りました。二年前には最後の夏の大会で仲間の選手は、ベンチに大貴さんの遺影を置き、ともに戦った姿が、地元テレビ局でも紹介されました。

「本校において友達とともに学び励み生きたことを証します」

母親が校長室に招かれ、卒業証書が手渡されました。

大貴さんが闘病中に七夕の短冊に込めた願いはただ一つ、「友達と毎日楽しい高校生活を送りたい」でした。

ウィリアム・ブレイクという詩人の「無垢の予兆」という詩の冒頭の四行です。

一つぶの砂に一つの世界を見　一輪の野の花に一つの天国を見

てのひらに無限を乗せ　一時（ひととき）のうちに永遠を感じる

これは、小さなものの中に大きな意味や価値を見出すことの大切さや、なにげない日常の中に美しさや深さがあることを教えてくれています。

本校の校門に掲げられた、「積微力行」という言葉は、「小さなことの積み重ねが大切であり、労を惜しまず励み努めなさい。」という意味です。「今」を積み重ねることが次の「今」につながり、大きな夢や希望へと膨らんでいきます。今生きていることを大切にすること、なにげない毎日を大切にすることで振り返ると大きな成長につながったと感じられる三年間にしてください。

最後になりましたが、保護者の皆様、本日はおめでとうございます。大切なお子様をお預かりする責任の重さを感じ、教職員一同は、精一杯力を注いで参ります。

お子様が大いに高校生活を謳歌し、現小松高校で生き生きと活躍しながら、未来への扉を拓くための今を築いていくことを祈念して、式辞といたします。

令和七年四月八日

愛媛県立小松高等学校

校長　　村井　浩昭